人物風土記

「自分だけと思わないで」

●「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」神奈川県支部設立発起人の

山田 真美子さん

区内在住　48歳

題字は
林文子 横浜市長

○…子宮頸がんワクチン接種による副反応で苦しむ被害者が声を挙げ3月に設立された「全国子宮頸がんワクチン被害者連絡会」の神奈川県支部立ち上げの主力となり、11月11日に趣意書を同連絡会HP上で公開した。活動が本格化し、代表として会議やメディアの取材に奔走する毎日だ。活動の根底にあるのは、「苦しいのは自分だけじゃないと知ってほしい」という強い思い。自分の娘と同様の症状で悩む被害者に声が届くことを切に願う。

○…「娘が痛みを最初に訴えたときは特に気にしていなかった」と接種当時を振り返る。中学校で剣道部に所属し、厳しい稽古にも食らいつく活発さだった娘が2011年8月、14歳6カ月のとき接種をしたところ、痛みとともに発熱感や痺れを訴えた。2回、3回と接種が続き、次第に症状が悪化。稽古中のふらつきや激しい頭痛、全身の不随運動も始まり診療科を受診したが、異常はみられなかった。精神科を案内されるなど、病名も明らかにされないまま不安な日々が続き、「もっと早く気付いてあげていれば」と悔やんだ。

○…転機が訪れたのは今年5月。テレビで子宮頸がんワクチンの副反応の映像を見て「スーっと血の気が引いていくのが分かった」ほど娘と症状が似ていた。すぐに同連絡会に電話し、同様の症状を訴えている人が全国にいることを知る。6月に参加した集団診察会で、国立精神神経研究センターの佐々木征行医師から「子宮頸がんワクチンの影響が考えられる」とようやく診断を受けた。

○…厚生労働省が6月に「積極的な接種は勧めない」という勧告文を公表。「未だに接種は可能な状況。県内では19人が被害者連絡会に登録している。各学校の対応に開きがあるなど課題も多い」と現状に触れ、「原因が分からないまま苦しんでいる人が他にもいるはず。県内の被害者が集結し、救済と支援を求めていきたい」と力強く繰り返した。